



# バンコクと八千代の友情の架け橋

## 未来へ続く子ども親善大使の交流

5月15日から22日まで、バンコク子ども親善大使12人を含む訪問団一行が本市を訪れました。この国際文化交流事業は「八千代子ども国際平和文化基金事業」の一環として、平成元年から始まりました。これまでに、バンコク都から278人、本市から306人の子ども親善大使がお互いの国を訪問して、友情の架け橋となりました。

▲5月18日ふれあいプラザで開催されたダイラックアン主催のウエルカムパーティー

### 子どもたちの想いが形になった ダイラックアンとテップウタイ

市では八千代子ども親善大使を、毎年タイ王国バンコク都に派遣しています。海外では、常に日本人として見られていることを、意識しなければなりません。出発前から生徒たちは事前研修で、自分たちの役割、両国の文化の違いや、タイ語のあいさつなどを学んで準備します。

慣れない海外での、表敬訪問や学校交流会などの公式行事は緊張の連続です。しかし、多くの人々と出会い、ホストファミリーなどの優しさに触れることで、お互いを認め合うことの大切さに気づき大きく成長します。

帰国してからもその気持ちが変わることはなく、平成16年4月に「バンコクの人たちに恩返しをしたい」「いつまでも交流を続けたい」という想いを持った有志が、OGOB会「ダイラックアン」を立ち上げました。

「ダイラックアン」は、タイで旅の安全や幸せを祈って、手首に巻いてくれる白い糸のこと。自分たちが訪問したときに、心を込めて巻いてもらった感動が心に残っていることから、この名前が付けられました。バンコク子ども親善大



▲昔遊びに挑戦。夢中になって何度も繰り返していました

使も、東の国よ永遠にという意味の「テップウタイ」を結成。想いが形になって、今でも途絶えることなく交流が続いています。

5月の受け入れでも、ダイラックアン恒例のウエルカムパーティーが、ふれあいプラザで行われました。このパーティーは自分たちが訪問したときの経験から、子ども親善大使としての緊張を少しでもほぐせるように企画しています。ホストファミリーと一緒に参加してもらい、子ども同士でゲームなどをしながら過ごします。今回もじゃんけん列車や、二人羽織などの楽しいプログラムに大きな歓声が。笑顔いっぱいの交流になり、バンコクの子たちはリラックスしてすっかり普段の顔に戻っていました。

### 阿蘇小学校の全体交流会では 民俗衣装で歌や踊りを披露

阿蘇小学校の訪問では、代表のナタプロット・マラシーさんが「この交流は、平成元年から始まりました。八千代市に来るのは初めてですが、不思議なことに令和元年で覚えやすいです。日本人にタイの文化を紹介して、日本の素敵な文化も学びたいです。日本とタイの架け橋になりたいです」と上手な日本語であいさつし、みんなを驚かせました。授業体験では、昔遊びや紙飛行機、火おこしなどに挑戦。初めてのけん玉やだるま落としなども、何度も繰り返して少しずつできるようになりました。二人一組で行う火おこしは、息を合わせるのが大変。なかなかうまくいかずに悔しそうでした。

体育館で行われた全体交流会では、美しいタイの民族衣装で歌や踊りを披露。帰りは迎いのバスまで、見送りの子どもたちが並び、お互いにいつまでも手を振り続けていました。

滞在中はこのほかにも、茶道連盟の皆さんの



◀自国の伝統文化に誇りを持っています

協力で茶道の作法を学んだり、春バラが満開のやちよ京成バラ園を見学したりしました。

### 平成から令和へ引き継がれる絆

31年という長い交流の歴史の中で、子ども親善大使は学校の友だちや家族、地域の人たちなどにも影響を与えながら、両国の強い絆を育んできました。子どもたちは広い視野で物事を捉えるようになり、多文化への興味を持ち続けています。世界へと羽ばたき、自分にできることを見つけて、国際貢献に関わっている人たちもいます。

こうした意識を持ち、周囲にも発信していく子どもたちを増やしていくことが、大切な取り組みの一つだと考えています。

来年1月には、令和初の八千代子ども親善大使12名がバンコクを訪問します。今回も一生忘れられない、大切な人たちとの出会いが待っていることでしょう。新しい時代と共に、これまでの絆がいつまでも引き継がれていきます。

お問い合わせは  
シティプロモーション課  
☎483-1151へ

広告

広告